

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

第49巻 第3号

目次

P 1
内灘砂丘から望む
白山
宮崎 顕治

P 2
“虎天牛”
八神 徳彦

P 4
石川県で行われて
いるニホンジカ生息
状況調査
北市 仁
八神 徳彦

P 8
白山麓おもしろ山歩
つれづれ記
梶 典雅

P14
中宮展示館で観察
されたオオムラサキ
福田冨希子
北市 仁

P16
センターの動き



内灘砂丘（内灘町総合運動公園）から望む白山

内灘砂丘は河北潟と日本海の間が発達した日本三大砂丘の一つに数えられる大きな砂丘で、特にこの公園の展望台からは南側の白山だけでなく、東は遠く立山連峰が連なる姿が見え、北は能登半島、西は日本海と全ての方角で眺望が楽しめます。

砂丘上から南方向を望むと、河北潟、加賀平野と続き、山並みの奥に白山がそびえています。白山山頂部は前回の白峰（西山）からの見え方と真逆に近い並びで、写真左から剣ヶ峰、御前峰、大汝峰のピークがほぼ並んで確認でき、少し離れて七倉山、四塚山が見え、写真最右のピークが別山になります。冬の晴れた日は空気が澄んで、より近く見えることが多く、運が良いと写真のように赤く夕日に染まった白山を見ることができます。

白山の眺望は、加賀地方でも南側に優れた場所が多いですが、ここも引けを取らない魅力があります。
(宮崎 顕治)

“虎天牛”

八神 徳彦（白山自然保護センター）

虎天牛とは？

「牛」年から新しい「虎」年になりました。それでは「虎天牛」と書いてなんと読むかわかりますか。答えは「トラカミキリ」で、虎のような縞模様を持ったカミキリムシの仲間のことです。「天牛」という字は、カミキリムシの長い触角をもった姿から「空飛ぶ牛」に見立てたのかもしれませんが。トラカミキリは、カミキリムシの中のグループで、日本にはおよそ 70 種類ほど生息しており、体は密に毛で覆われており、毛色によって縞模様などきれいな斑紋を持つものが多いです。

トラカミキリの仲間は石川県には 30 種類ほどおり、早春から秋まで季節や生息場所を違えて生活しています。ここではそのいくつかを紹介します。

【トラフカミキリ】

体の大きさが 2cm 程度と比較的大きく、黄色地に黒帯模様で、最も虎らしいカミキリです。よく見ると虎というより、蜂に似た姿をしており、刺されると痛い蜂の真似をして敵から逃れるという正に「虎の威を借りる」カミキリです。クワの木に生息するため、養蚕の盛んだった昔はクワ畑がたくさんあり、トラフカミキリも多かったと思われていますが、現在ではクワも少なくなり、トラフカミキリもほとんど見ることができません。真夏に大きなクワの木を探すと見つかるかもしれません。



トラフカミキリ

【スギノアカネトラカミキリ】



スギノアカネトラカミキリ

赤茶色の肩と白と黒の縞模様を持つ 1cm ほどのカミキリで、成虫は春にミズキやクリ、シイ類などの花に集まり、花の蜜や花粉を食べています。スギやヒノキの材質を悪化させる林業害虫としても有名で、スギなどの枯れ枝に産卵し、幼虫は枯れ枝の中を食い進み幹に入ります。穴をあけられた幹には菌が侵入し、木材を変色させ「とびくされ」とか「ありくい」という林業被害を与えます。

【エグリトラカミキリ】

灰色の翅に黒い紋があり、翅の先がえぐれるようにとがった 1cm ほどのカミキリです。春から初夏に伐採された広葉樹の幹に集まり、屋外に積み上げた薪の上を走り回っている姿をよく見ることができます。春から夏には、新しく伐採された広葉樹には多くのカミキリが集まり、観察するのにとても適しています。山の近くにある伐採した木材の集積場所や、薪置き場は絶好のカミキリスポットですので探してみるのも楽しいです。



エグリトラカミキリ

【クリストフコトラカミキリ】

茶色と黒の翅に黄色の縞と紋がある 1.5cm ほどのカミキリで、あまり多くはありませんが、他の虫に先駆けて早春に現れます。4月の下旬から5月の中旬に、新しく伐採されたドングリの木が積んである場所を見つけたら、よく観察してみてください。幹の上を走り回り、時には交尾している姿を観察できるかもしれません。よく似たコトラカミキリは、石川県では絶滅危惧種で、もし見つけたら大発見です。



クリストフコトラカミキリ

【アカジマトラカミキリ】

夏の終わりから秋に現れる赤と黒のコントラストが鮮やかな 2cm ほどのカミキリです。山沿いのケヤキやエノキの大木にすることが多く、衰弱部分や折れた枝などで見つかります。また、夏の終わりに咲くイタドリやウド、タラノキの花にも集まるので、ケヤキやエノキの大木の近くに咲くこれらの花を探すのがつけるコツです。カミキリムシとしては珍しく「死んだふり」をします。



アカジマトラカミキリ

【タケトラカミキリ】

黄土色の翅に黒の縞や紋がある 1.5cm ほどのカミキリで、暑い夏の日中に見ることが多いです。多くのカミキリが木の幹や枝に卵を産み、幼虫はそれを食べますが、タケトラカミキリの幼虫は枯れた竹を食べ、竹で作った垣根などでも見ることがあります。真夏に、窓や壁などにとまっていることもあり、庭にある竹の支柱や垣根を幼虫のすみかにしているのかもしれない。



タケトラカミキリ

【マツシタトラカミキリ】



マツシタトラカミキリ

春から夏の山地に生息し、クリ、ミズナラ、コナラの大木の幹を歩いていることが多く、樹皮に産卵し幼虫は樹皮を食べます。また、成虫はミズキ、クリ、ノリウツギなどの花に集まり、蜜や花粉を食べます。スギノアカネトラカミキリに似ていますが、翅の赤茶色、黒がよりはっきりとして、白い線もくっきりしています。

トラカミキリの仲間だけでも、このようにいろいろな種類がいて、それぞれ異なった生活をしています。図鑑や SNS で知った知識をもとに、今年いろいろな虫を探しに行きませんか。

石川県で行われているニホンジカ生息状況調査

北市 仁・八神 徳彦（白山自然保護センター）

はじめに

近年、ニホンジカ（*Cervus nippon*；以降、シカ）は日本全国で分布が拡大しています。シカはかつて全国的に生息数が減少し、保護が図られたこともありましたが、近年では生息数が増えていることから捕獲等の管理が求められるようになりました。シカはオスとメスで見た目が大きく異なります。オスは立派な角を持ち、メスよりも体が大きくなりますが、メスは体がオスよりも小さいことに加えて角を持ちません。また、シカは群れで行動することがあり、かつ多様な植物をエサとして食べることができるため、一度に多くの植物をエサとして利用します。こういった特性から、ときに増えすぎたニホンジカは様々な被害をもたらすのです。

シカの高密度地域では、植物への食害、角研ぎや樹皮剥ぎによる森林被害、これらから波及する生態系被害が懸念されます。実際に顕著な食害がもたらされた地域では、地表があらわになったことで、雨によって土砂流出が起きることも報告されています。このように悪者扱いされてしまうシカですが、シカ肉はジビエ料理でおいしく活用されるという側面もあります。

そんなシカですが、石川県にはどれだけのシカがいて、オスやメスや幼獣（子どものシカ）などの生息状況はどうなっているのでしょうか。シカなど野生の動物を探したり、数えたりすることは非常に難しいことですが、こういった方法でこういったことを調べれば生息状況を把握できるのでしょうか。今回は石川県に生息するシカに関して、どのような調査を行い、どのようなことがわかってきたのか、ということを紹介したいと思います。

自動撮影カメラ調査

石川県内のいたるところで、動物撮影用の自動撮影カメラ（写真1；以下、「カメラ」とする）を設置しています。このカメラは動物が前を通ったときに内蔵された赤外線センサーが反応し、昼夜を問わず動画を撮影することができます。撮影された動画は日時等の情報と一緒に記録され、後から動画を確認することができます。撮影された動画からは、映った動物種の判別ができます。また、シカだった場合は角の有無でオス・メスの判別ができ、親子連れであれば幼獣の確認もできるので、性



写真1 設置した自動撮影カメラ



写真2 夜間撮影されたオスのシカ
角の先端が4つに分岐している

別や年齢などの詳細な情報を分析することに役立ちます。石川県内ではシカ以外を調査対象としたカメラも合わせると、夏期を中心として石川県内に多いときは130台ほど設置してあるので、山の中で実物のカメラを見たことがある方もいらっしゃるでしょう。

カメラは周辺の自然環境や状況が変わらなければ、あらかじめ決められた毎年同じ地点の同じ木に同じ向きで設置します。地面からおよそ1mの高さで、けもの道や林道など、動物が通りそうな開けた場所をね

らって設置することが多いです。こういったカメラ調査は、設置さえしてしまえば維持管理に労力がかからないことが特徴で、使用される機会が増えています。

カメラは動物に警戒されることがほとんどないので、自然な姿を撮影することができます(写真2)。また前述したように動画から動物の種類などが判別でき、シカに関しては角の形や有無でオスとメスを見分けることができます。シカは分布を広げるときに、まずオスから見つかるようになり、そのあとでメスも見つかるようになり、最終的に幼獣(子どものシカ)が見られるようになっていくといった、大きく3段階の生息状況に分かれます。

こういったカメラ調査の結果は一年だけの結果を見ることもできますが、何年も継続して調査し、その結果から中長期的な傾向を見ることも重要です。実際に石川県内のカメラ調査の結果を見てみると、調査を開始した平成26年ではオスジカが多く見られており、令和2年までにメスジカも少しずつ見られるようになってきました(表1)。このことから、生息状況はメスも分布する段階にあり、今後は繁殖によって石川県内でもシカが増えることが予想されました。

表1 カメラ調査の結果

年度	割合 ^{*1}		オス比 ^{*2}
	オス	メス	
平成26年	94.9	2.0	0.98
平成27年	75.0	15.7	0.83
平成28年	68.9	18.7	0.79
平成29年	72.4	19.0	0.79
平成30年	77.8	11.9	0.87
令和元年	77.7	12.1	0.87
令和2年	70.3	18.4	0.79

*1 総撮影延べ頭数に占める割合

*2 性別を判別できた撮影延べ頭数に対する比率



写真3 シカが残した糞塊
10粒以上で、中くらいの新鮮度

糞塊密度調査

シカをはじめ、野生動物はすべての個体数を数えることはできません。その代わりに、動物たちが残した痕跡からその動物の数を推定する方法が確立されています。石川県では、シカが残した糞塊(粒状の糞が集まったもの; 写真3)を数える調査を実施しています。シカは粒状の糞を移動しながら残していくため、この糞塊のあった箇所数を調べることでシカの数推定します。シカの個体数が増えれば、それだけシカの糞塊も増えているだろう、という考え方に基づく調査です。



写真4 糞塊密度調査の様子
木の表面がシカの角で傷つけられている

糞塊密度調査は、山林の中に4～6km程度の調査ルートをあらかじめ設定し、毎年10月下旬から11月上旬の秋期に、同じルート上を歩きながらシカの糞を探するという方法で実施しています。山林の中では、ときに「道なき道」を歩かなければいけないときもあり、なかなか大変な調査でもあります（写真4）。

石川県では南加賀地域を中心に36本の調査ルートを設定しており、GPSや地図などを手に各ルートを2人1組で踏査し、左右それぞれ約1mの範囲で発見したシカの糞を記録していきます。発見した糞は、その粒の多さを「10粒以上か、10粒未満か」に分けて記録し、同時に「新、中、旧」といった新鮮度についても分けて記録します。この糞塊密度調査の結果は、推定式に当てはめることで、シカの密度に変換することができます。

これらの調査もカメラ調査と同様に、中長期的な傾向を見ることが重要です。調査を開始した平成24年から令和2年までの結果から、どうやら石川県内ではシカの糞塊密度は年々高くなっており、少しずつシカの生息数も増えつつあることが推察されました（図1）。

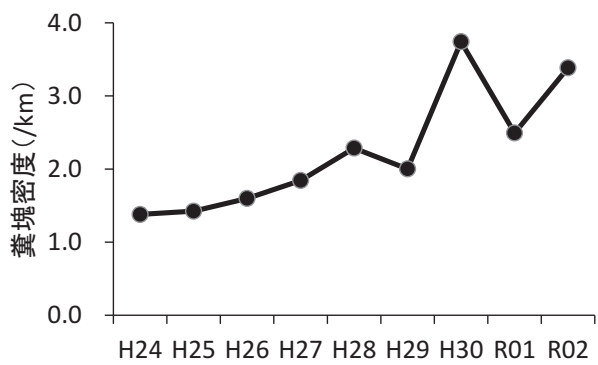


図1 シカの糞塊密度調査の結果

年々少しずつ糞塊密度が高まっている

ライトセンサス調査

通常、野生動物は姿を隠して日中に観察することは困難ですが、夜間は餌を食べるなど行動することが多くなり、姿を確認する手段さえあれば見つけやすくなります。ライトセンサスは、夜間に遠くまで照らすことのできるライトをつけて、低速で走る車からシカを探していく調査です（写真5）。夜間にライトで照らされたシカの目は光を反射して光るので、姿を確認することができます。この調査は、草原など遠くまで車から見通すことができる場所で行うのが適していますが、白山麓にはそのような場所は少なく、川沿いなど樹木が少ない場所を選びました。

調査は平成30年から毎年11月中下旬に、白山市の林道を中心に5本の調査ルート合計52kmで行いました。調査は日没後の17時半から20時半にかけて、車1台に運転手1人、ライト照射とシカの観測に2人の3人態勢としました。車の両サイドを強力ライト（Q-Beam 400,000 candlepower BIG MAX, BRINKMANN 社製）で照らしながら車を時速10km程度で走りながら動物を探しました（写真1）。動物を発見した場合は、車を止めて双眼鏡で確認するとともに、動物の種類



写真5 車によるライトセンサスの様子



写真6 ライトに浮かび上がったカモシカ

と位置を記録しました。

今までにライトセンサスで確認された動物は表2のようで、カモシカ（写真6）、テン、ノウサギ、ツキノワグマ、タヌキ、モモンガ、コウモリの仲間などです。車からの距離が50m以上にもなると、反射する目だけはわかるのですが、種類まではわからないものもありました。テンなどは、車のすぐそばまで近寄ってきて、昼間にはなかなか見ることのできない姿を観察することができました。しかし、肝心のシカはなかなか姿を見ることはありませんでしたが、2020年にとうとう瀬波川で見つけることができました。瀬波川の対岸の川岸でゆっくり草を食べており、距離が200mほど離れていたため、はっきりとは観察できませんでしたが、双眼鏡で見ると、4つに分かれた立派な角を持ったオスの成獣でした。ライトセンサスを始めて4年間で、確実にシカが観察できたのはまだ1回ですが、これからも毎年続けていくことで、客観的にシカの生息状況を判断する情報になっていくと思います。

表2 ライトセンサスで発見された動物種

調査地	標高(m)	距離(km)	2018	2019	2020	2021
西山(白峰)	660-1,070	9	中型不明1	発見なし	発見なし	発見なし
赤谷(白峰)	470-830	10	キツネ1、テン1、カモシカ2	コウモリ類1	テン1	ニホンジカ(?) 4、イノシシ1、ツキノワグマ1、カモシカ1
市ノ瀬(白峰)	530-830	10	アナグマ1、モモンガ1	タヌキ1、ツキノワグマ1、中型不明1	中型不明1	発見なし
瀬波川(瀬波)	300-490	6	中型不明1、テン1、カモシカ2	発見なし	ニホンジカ1、カモシカ2、テン1、中型不明3	ツキノワグマ2、キツネ1、カモシカ1、中型不明2
高倉山(中宮-木滑)	310-990	17	ノウサギ1、タヌキ1、中型不明1、カモシカ1	発見なし	テン1、タヌキ1	実施しなかった

おわりに

南アルプスなどでは、貴重な高山植物の生育地にシカが侵入し、食害により植生が衰退している場所もあります。白山では、まだシカによる林業や高山植物への影響は確認されていませんが、白山麓のシカの生息状況の変化を把握することがとても重要です。本誌では石川県内に生息するシカの生息状況を把握するために実施されている調査について紹介しました。シカの生息状況のうち、生息状況を調べるためのカメラ調査、生息数を推定するための糞塊密度調査および夜間に調査を行うライトセンサス調査がそれぞれ実施されています。このほかにも、ここで紹介しきれませんでした。狩猟者からの目撃情報を集める出猟カレンダー調査も実施しています。これらの調査結果は、今後の石川県のシカをどのように管理していくかを定める石川県ニホンジカ管理計画などの策定に活用されています。

シカなど野生動物の個体数や分布域は常に変化し続けています。したがって、毎年の変化を調べる必要があります。このようなモニタリング調査を続けることができれば、色々な情報を知ることができるようになります。シカをはじめ、野生動植物の保護や管理にあたってはいろいろな対策が必要とされます。特に近年増えつつあるシカについては、捕獲による個体数管理だけでなく、生息地管理や被害管理が求められます。

石川県では、隣県の岐阜県や福井県と比較するとまだまだシカの生息密度は高いとはいえませんが、徐々に生息数が増えつつあることがわかってきました。引き続き、我々も石川県に生息するシカの動向に注意してモニタリングを続けていかねばなりません。

参考文献

石川県（2018）第2期ニホンジカ管理計画。

石川県（2020）令和2年度石川県ニホンジカ被害未然防止モニタリング調査業務報告書。

白山麓おもしろ山歩さんぽつれづれ記

梶 典雅

近年、それなりに名の知れた低山に登る人が増えていると感じるのは、やはり新型コロナの影響なのでしょう。要因はともかく、それはそれでよいことではないかと思えます。

というのは、著名な山の特定の時期に登山者が集中することに比べ、環境や施設への負荷の低減・過密回避、さらに健康維持にもつながる山登りの形は、SDGs（持続可能な開発目標）の面からも意義があると言えるでしょう。また、山を歩く魅力や楽しみは、多様で奥深いものだと考えるからです。

そこで、ぼくがこれまでに歩き、楽しんできた、ときには名もない幾多の山々の中から、比較的近年の白山麓での山歩きをいくつか振り返ってみることにします。それらは、ガイドブックやSNS頼りではない、小さくても未知の世界の探訪を思い描き、実行する達成感を味わえたものと思っています。

なお、取り上げた山はすべて白山市域であり、地名等にその表記を省きました。

予期せぬ出会いの雪割草

低山歩きの適期といえば、やはりなんといっても春でしょう。雪融けを追うように咲き競う野山の花、新緑が彩る残雪の山。ぼくにとって春の到来を最も実感するのが、これらの風物です。

ぼくが歩く低山には、道がない山もけっこうあり、そういう山では、いわゆる藪（ブッシュ）漕ぎとなり、沢をたどる場合もあります。濃密なササやヤセ尾根のかん木、ツルや刺のある草木に悩まされ、泣きたくなることもしばしばですが、思わぬ出会いに感動という場面もあります。

数年前の3月下旬に河内町吉岡辺りの山を藪漕ぎで周回していたときのこと。一面のホンシャクナゲ群落に驚き、花の時期はさぞかし壮観だろうなどと思いながら、行く手を阻むシャクナゲをなんとかやり過ごして下っていくと、次にはなんと！ミスミソウ（広義）の花が迎えてくれまし



【写真1：新緑と残雪の白山】



【写真2：ホンシャクナゲ群落】



【写真3：ミスミソウ（雪割草）】

た。一般的に雪割草と呼ばれているもので、群生とまでは言えない密度ながら、紅紫色や白色の花をつけたかなりの数の株が見られ、思わず歓声を上げ、小躍りしたくなりました。

白山信仰の旧跡？「仙の堂」探索

以前から気になっていた「仙の堂跡」（図1 参照）を探索したのは、2020年4月でした。

仙の堂は、白山信仰に関わる旧跡とされ、『歴史の道調査報告書第五集 信仰の道』（1998、石川県教育委員会）には、「伝説の禅定道」の伝承地として「金劔宮から東方に約1km余り、南面する標高500mの地点にかなりの規模を有する数段の平坦面が広がり、明確に平安時代の土器の散布が認められる」と書かれており、本誌第26巻第4号にも関連する記事が載っています。

これらに掲載された地図と地形図を頼りに、風吹峠の先の車道から獅子吼高原への登山道に入り、等高線の間隔が広いところに当りを付けて下って行くと、それらしい平坦面があり、周辺を歩き回って、ここに違いないと思いました。ただ、『鶴来の文化財』（1993、鶴来町教育委員会）には、「針葉樹林と広葉樹林の混生した中にある横穴洞窟を俗に「仙の堂」と言っている」と書かれていることを先日知り、いま一つ釈然としていません。

ともあれ、このような白山信仰の旧跡や伝説の地を探して歩くのはおもしろく、ワクワクします。しかも、このときは登山道の傍らに咲くウスバサイシンに出会うというラッキーもありました。カンアオイ類と同じなかまで花もそっくりですが、生育地も個体数も少なく、『いしかわレッドデータブック2020』では絶滅危惧Ⅱ類（絶滅の危険が増大している種）になっています。



【写真4：仙の堂跡？】



【写真5：ウスバサイシン<ウマノスズクサ科>】



【図1：仙の堂跡？】

ちょっといづくカタクリ余話

早春の花といえばカタクリ、という人が多いのではないかと思います。群生することも多く、明るい春の色で林床を染め上げる様子は、他の花の追随を許さないものでしょう。

カタクリは、早春から初夏までの短期間に養分を蓄えて実を結び、それ以降は地上部が枯れて翌春まで、いわば寝て暮らす「春植物」の一つですが、その中でも光環境の変化により敏感だという気がします。十分な日光を受ければ、他の植物に先んじて生長・増殖し、一面の群落を成すのではないかと。

そういえば、30年以上も前、獅子吼高原整備事業に関わり、その一環として、前述の獅子吼高原への旧道を伐開したところ、カタクリが「待ってました」とばかり、1、2年で路面にまで広がったことを思い出しました。

白山麓でカタクリの見どころといえば、奥獅子吼山への登山道がよく知られていますが、近年は、瀬波川キャンプ場前のエイ谷出合からオンソリ山（後述）の方へ少し登った辺りが、地元瀬波の方々による環境整備も功を奏して見事な群生地となり、訪れる人が増えているようです。

県内におけるカタクリの分布は、金沢市の浅野川以南というのも興味深いのですが、旧白峰村には分布しないと聞いたのは実に不思議であり、本当にそうなのか、気を付けて歩くようにしています。



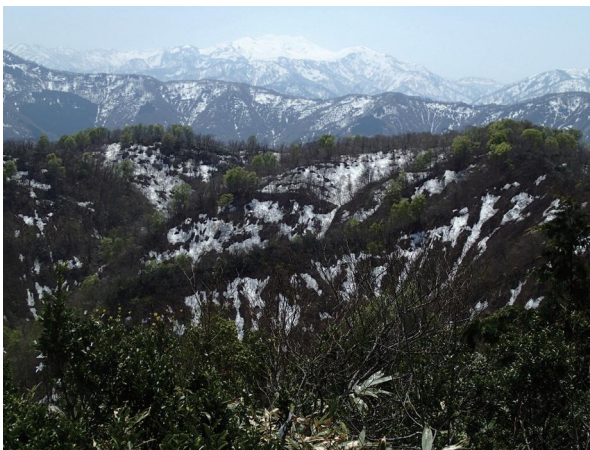
【写真6：カタクリ群落】



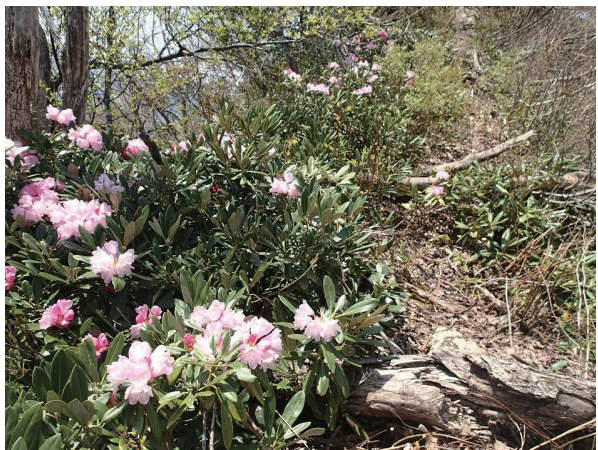
【写真7：カタクリとギフチョウ】

三拍子そろったおいずるやま 笈山

笈山は、上記のオンソリ山(888.6m)と峰続きの標高890mの山です。ぼくがこの山に注目し、登った20年前は、情報が少なく、道もオンソリ山までしかありませんでしたが、現在は熱心な地元の方々により、上記の瀬波エイ谷口その他、宿泊研修施設「白山里」の近くや笠山林道、内尾からも登山道が



【写真8：笈山山頂から望む残雪の白山】



【写真9：笈山のヤセ尾根に咲くホンシャクナゲ】

整備されています（図2参照）。

笈山も修験や白山信仰に関わる山で、近くに「ウマヤノツボ」と称する遺構があるのも特筆されま
す（詳しくは本誌第43巻第2号参照）。また、白山信仰の山だけあって白山の眺望にも優れているうえ、シャクナゲやオンソリ山一帯のブナ林など魅力満載で、特に春がお薦めです。

妄想ふくらむ太白山と祇陀寺跡

「吉野十景」は、吉野一帯の景勝地10か所を選んだものですが、近世以降、多くの文人墨客が訪れていたそうです。その十景の半数は山で、太白山、鉢峰山、虎狼山、仙雲峰、雲竜山がそれです（表記等は史料により異同あり）。

しかし、これらが現在のどの山に当たるのかは、雲竜山は別として、あとは虎狼山が手取川の対岸にあるとされるので岳峰だろうと推定されるに過ぎません。ぼくが見た2、3の史料では、これら山々の位置関係の記述が大きく異なり、比定（資料等を比較して推定すること）は容易ではありませんが、あれこれ推測しながら山を歩くのも楽しいものです。

そういうなかで、たとえば図3の691m標高点の峰は、太白山だったらいなと思っています。というのは、吉野十景に選ばれた山であれば、吉野の集落近辺から望まれ、景観的にも優れているはずと思いつつも、未だ確認・検討をしていないからです。

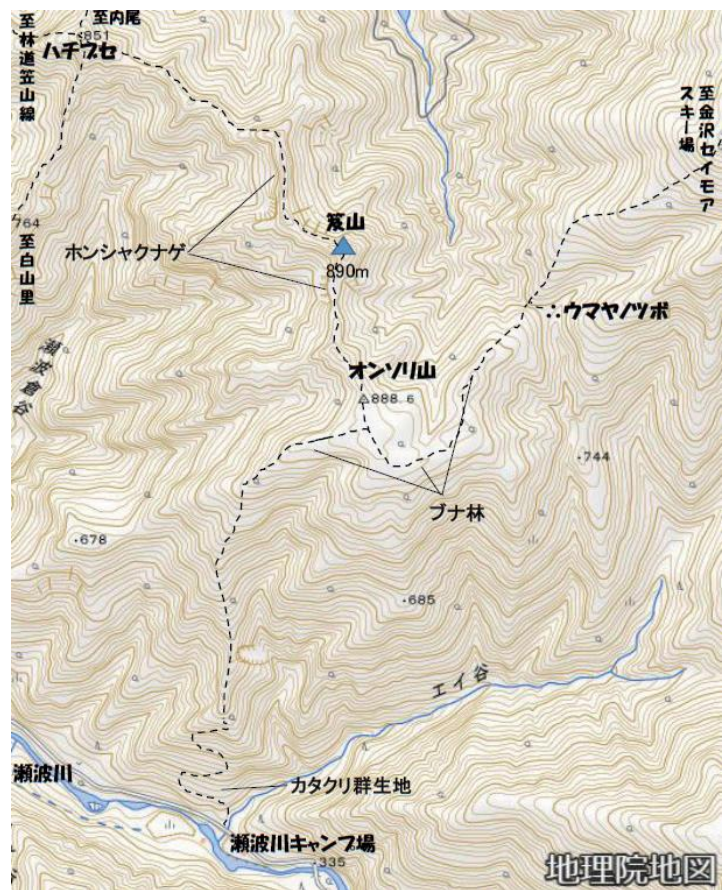
ちなみに、その峰は吉野近辺では最も標高が高く、以前は樹木に遮られていた白山もバッチリ望めるように刈払われていました。

そして、691m峰から南に続く釜中山（658m）との鞍部を西へ下って行くと、平らな杉林の中にぽっかりと開けた空間が……。そこには苔に覆われた沢をゆっくり水が流れるという、ちょっと特異な様相の水辺があり、その清冽な水とどこことなく侘び寂びた雰囲気、あの伝説的な祇陀寺があった場所はここではないか？との妄想が膨らみました。

祇陀寺の開山は、大智禪師か、その師とされる明峰禪師なのかはよくわかりませんが、どちらかが吉野十景の選者だということです。そんな縁も感じながら訪れた3度目の2020年4月には、希少



【写真10：オンソリ山のブナ林】



【図2：笈山】

なフタバアオイの群生確認という収穫もありました。先に挙げたウスバサイシンと同じ科で草姿も似ていますが、花は茶碗型。同じく絶滅危惧Ⅱ類です。

季節^{たが}を違えて山を歩けば、新しい発見もあり、興味は尽きず、宿題が増えるばかりです。



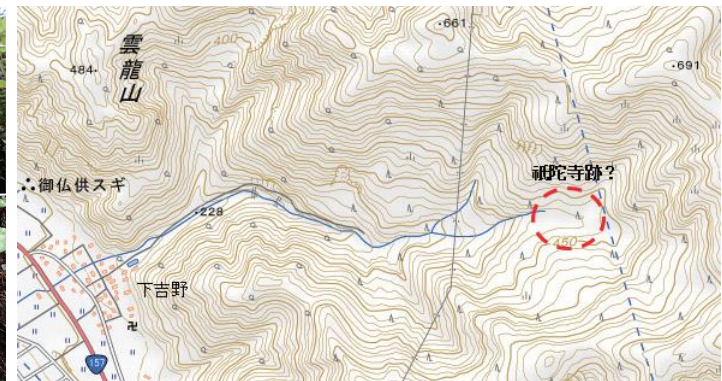
【写真 11：祇陀寺跡の平坦地か？】



【写真 12：なんともいえない雰囲気醸す水の流れ】



【写真 13：フタバアオイの群生と花】



【図 3：祇陀寺跡？】

心惹かれる地形と三角点

もう一つ山歩きの楽しみというか、山に向かう理由・動機として地形図があります。これを眺めては、ヤセ尾根や岩場、あるいは異様に平坦な尾根・窪地に興味をそそられ、まずは机上山歩、そして現地探索とあいなるわけで、そういう場所で希少な植物に出会うこともあります。

それと三角点。話せば長くなるので、国が国土の地図制作のために設置した測量基準点の一種、山頂などにその標柱（石）が見られる、と言うにとどめますが、それを目指して山に分け入る人がいるのです。ぼくは、それだけを目的にすることは少ないものの、ある方がモチベーションは上がるし、そこに至る苦勞に比例して標石を見つけたときの喜びが大きいことも実感しています。

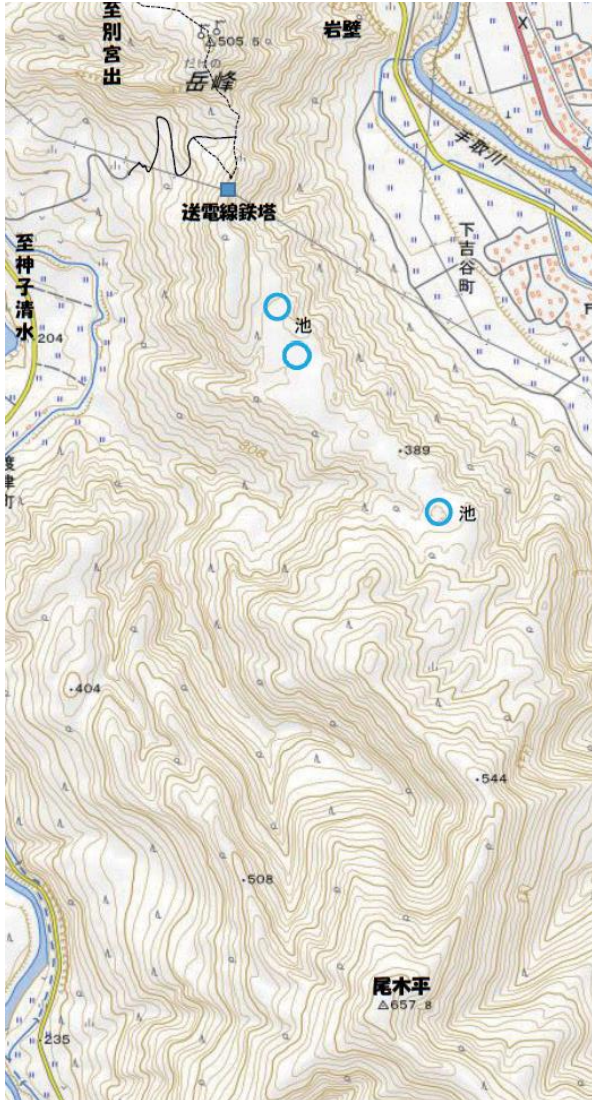
さて、図 4 の上部に三角点マークと標高が記された岳峰（前述の吉野十景・虎狼山）は、昔は修験の山で、地図にも記された岩壁が行場であったようです。現在は山頂にアンテナが林立し、別宮出町から登山道があり、神子清水町^{みこしみず}からも車道や送電線鉄塔巡視路（低山歩きにはありがたい存在）を使って、南から岩がちの尾根を攀じ登ることもできます。

一方、急峻な岳峰と対照的な南に連なる広く平坦な尾根にも心惹かれ、訪れてみると、気持ちのよい雑木林が広がり、案の定、池もありました。その後、『鳥越村史』（1972）の「白山への道」所載の地図に、岳峰と 658m 峰との間に「卍薬師堂」の文字と破線（行道）が書かれているのを見つけ、

善は急げと 2019 年 3 月、657.8m 峰（三角点名「尾木平」）を目指しました。

期待した古道の跡は、積雪もあってかよくわかりませんでした。山頂には順調に達し、雪に覆われた三角点標石もなんとか掘り当てることができました。

こうして書いてみれば、やはり物好きのたわごとに過ぎないかもしれず、これにて失礼、下山します。



【図 4：岳峰から尾木平】



【写真 14：岳峰の南方尾根にある池の一つ】



【写真 15：尾木平山頂・三角点標石】

※使用地図は全て電子国土 web を使用

中宮展示館で観察されたオオムラサキ

福田冴希子・北市 仁（白山自然保護センター）

はじめに

オオムラサキ (*Sasakia charonda*; 写真1) というチョウをご存知でしょうか。オオムラサキは日本の「国蝶」として、1957年に日本昆虫学会によって選定されたタテハチョウの1種です。梢近くや木の周りを力強く飛ぶ雄大な姿や、青紫色に輝くオスの翅が大変美しいことから、チョウ愛好家の間でオオムラサキを国の蝶としてふさわしいとする機運が高まったことで、国蝶として認められた経緯があったようです。

国蝶という象徴的なオオムラサキですが、中宮展示館（以降、展示館）周辺では、蛇谷で1981年8月、中宮で1985年7月にそれぞれオオムラサキの目撃記録こそあるものの、写真として撮影されたオオムラサキの記録はこれまでにありませんでした。そこで本誌では、美しく雄大なオオムラサキが展示館で観察されたこと、また写真として初めて記録を収めることができたことを紹介します。



写真1 観察されたオオムラサキのオス
口吻を伸ばし、壁から吸水しています

オオムラサキの生態や特徴

オオムラサキの分布は日本だけでなく、ベトナム北部、台湾北部、中国および朝鮮半島まで非常に広く、日本国内においても九州から北海道南部まで広く分布します。また成虫はクヌギやコナラなどの広葉樹の樹液によく集まりますが、幼虫は食樹としてエノキやエゾエノキの葉を食べて成長します。このことから、オオムラサキが生活環を完結するには、エノキやコナラなどの広葉樹によって構成される雑木林といった自然環境が求められます。

オオムラサキという名前は、その体サイズの大きさと前翅表面の鮮やかな紫色に由来します。オオムラサキはタテハチョウの仲間では世界最大の種で、前翅長（前翅の付け根から先端までの長さ）は50～70mmに及びます。他のチョウの前翅長と比較すると、身近に見られるモンシロチョウは20～30mm、ナミアゲハは35～60mmであることから、オオムラサキの大きさも想像できるかと思います。

ただし、青紫色の翅を持つのはオスだけで、メスは茶色に紫がかったような翅の色をしており、一般的に体サイズは、オスよりもメスの方が大きく貫禄があります。このことから、オオムラサキの成虫は大きさと翅の色という見た目の違いによって、オスとメスを見分けることができます。

国蝶としても選定されるほど美しく大きなオオムラサキですが、近年では生息に良好な低山や丘陵地が開発されていることや、人の手が入らない里山の雑木林が増えたことで、生息環境が減少し、環境省のレッドリストおよび石川県のレッドデータブックでは準絶滅危惧種として選定されています。

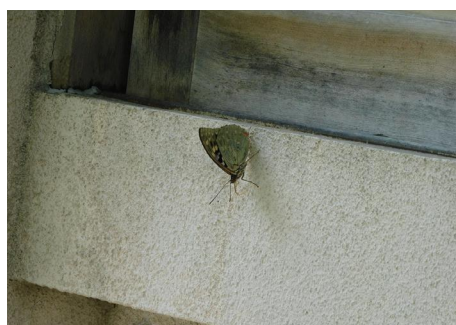


写真2 翅を閉じたオオムラサキ
閉じた翅では性別が見分けられません

中宮展示館に飛来したオオムラサキの観察記録

2021年7月15日、晴天のなか中宮展示館の壁で吸水するオオムラサキが発見されました。鮮やかな青紫色の翅に、白、橙、黄色の斑点模様をつけた大きなチョウであったことから、オオムラサキのオスであることがわかりました。コンクリート製の壁を吸っていたオオムラサキですが（写真1）、このような行動はコンクリートなどの人工物に含まれたナトリウムなどの栄養を吸うために行われ、羽化直後のオスによく見られると考えられています。展示館に飛来したこの個体も、翅の傷なども見られなかったことから、羽化からそれほど時間が経っていない個体であったと思われました。

吸水していたオオムラサキを観察していると、一生懸命に口吻^{こうぶん}を動かす様子が見て取れました。吸水に集中しているのか、撮影のために近づいても飛び立つ気配はないものの、その美しい翅をなかなか開いて見せてはくれず、写真1を撮影するには時間を要しました。また、撮影時のオオムラサキの姿を思い返したり、奮闘しながら撮影した写真を見返したりしていると、オオムラサキというチョウは、その美しさや雄大さから、やはり国蝶というシンボルに選定されるにふさわしい魅力を備えたチョウであることが実感できました。

おわりに

中宮展示館では、開館期間中（例年4月下旬～11月中旬）はスタッフが常駐しており、可能な限り展示館周辺を歩き、動植物やその季節変化に関して自然観察と情報収集に努めています。そんな中でもオオムラサキが観察された回数は、筆者らで確認する限り今回の観察を含めても、累計で3回と少ないものでした。展示館周辺や裏山にはオオムラサキ幼虫の食樹となるエノキは確認されておらず、エゾエノキがわずかに見られる程度で、成虫のエサとなるコナラも多くはありません。もしオオムラサキが展示館周辺で発生していれば、これまでにもう少し多くのオオムラサキを見つけることができていると考えられます。したがって、今回観察されたオオムラサキの個体は、どこで発生したかは詳しくわかりませんが、ほかの生息地から展示館周辺まで飛来してきたものと推測されました。

中宮展示館ではここで紹介したオオムラサキ以外にも、さまざまな動植物が季節によってさまざまな顔を見せてくれます。来年の開館期間にはぜひとも足を運んでいただけたらと思います。

参考文献

嵐山町ホームページ 国蝶オオムラサキ。

<http://www.town.ranzan.saitama.jp/0000001012.html>（2021年7月確認）

槐真史（2013）ポケット図鑑日本の昆虫1400①チョウ・バタ・セミ，文一総合出版。

日高敏隆（1997）日本動物大百科 第9巻 昆虫Ⅱ，平凡社。

石川県野生動物保護対策調査会（2000）石川県の絶滅のおそれのある野生生物 いしかわレッドデータブック 動物編。

石川むしの会・百万石蝶談会（1998）石川の自然環境シリーズ 石川県の昆虫。

昆虫エクスペローラー 昆虫図鑑 オオムラサキ。 <https://www.insects.jp/kon-tyoomura.htm>（2021年7月確認）

小檜山賢三・高瀬武徳・藤岡知夫（1971）山溪カラーガイド42 カラー日本の蝶，山と溪谷社

日本チョウ類保全協会（2012）フィールドガイド 日本のチョウ，誠文堂新光社。

オオムラサキセンター オオムラサキについて。 <http://oomurasaki.net/oomurasaki.html>（2021年7月確認）

ぶてろんワールド 国蝶オオムラサキ。

<https://www.pteronworld.com/topics/classfication/nymphalidae/apaturinae/oomurasaki.html>（2021年7月確認）

志村隆（2005）日本産幼虫図鑑，学習研究社。

海野和男（1998）海野和男 蛾蝶記，福音館書店。

センターの動き（令和3年10月1日～令和4年1月31日）

10.9	中宮展示館紅葉 days（～17日）	（中宮）	11.19	第1回白山二県合同山岳遭難防止対策連絡会議（web）	
10.18	外来植物除去小桜平	（白山）	11.20	県民白山講座「謎解き白山」	（白山市）
10.18	シカ糞塊調査（～11.12）	（金沢市以南）	11.20	ブナオ山観察舎開館	（尾添）
10.22	竹腰永井建設欄・翠星高校外来植物除去作業指導	（市ノ瀬）	11.21	白山自然ガイドボランティア友の会役員会	（白山市）
10.31	手取峡谷で石ころさがし	（白山市）	12.1	筑波大学留学生実習講義	（白山市）
11.7	市ノ瀬V C閉館	（市ノ瀬）	12.4	第2回ガイドボランティア研修講座	（白山市）
11.10	中宮展示館閉館	（中宮）	12.14	白山ジオパーク公認ガイド養成講座講師	（白山市）
11.15	ニホンジカライトセンサス調査（～29日）	（白山市）	12.20	中宮・一里野地区地域連絡会	（尾添）
11.18	特別天然記念物カモシカ通常調査会議	（白山市）	1.4	ブナオ山観察舎雪遊び days（～10日）	（尾添）
11.18	白山市トミヨ保全対策連絡会	（白山市）	1.25	県立大学講義：里山里海活用実践論講師	（白山市）



令和3年10月15日の夕刻、標高1900mより高い位置では、南は福井県境から北は見渡す限りまで広がる雲海が出現しました。



雪遊び days。福笑いならぬ福とら笑いです。今シーズンは雪がいっぱい。週末にはかんじきハイクができますので、ぜひ、お越しください。

たより

今年は寅年です。これにちなんでトラカミキリを取り上げました。寅年は、厳しい冬を乗り越え万物が芽吹き始め成長する礎となる年といわれています。少しでも早く新型コロナ禍を乗り越え、気兼ね無く登山ができる日が来ることを祈って止みません。

また、当センターで管理しているブナオ山観察舎が今シーズンで40周年を迎えました。コロナ禍で、特に大きなイベントはできませんが、記念バッジ・ステッカーを作成しました。数に限りがありますが、ブナオ山の動物を見つけた方に配布しますので、ぜひ当観察舎に遊びに来てください。

さて、今号の表紙は白山眺望のシリーズの最後となる内灘砂丘からの眺めです。金沢市以北を取り上げるのは最初で最後となります。金沢以北でも海岸に近い場所では美しい白山を眺めることができます。

（宮崎）

はくさん 第49巻 第3号(通巻194号)

発行日 2022年1月31日（年3回発行）
印刷所 前田印刷株式会社

編集・発行

石川県白山自然保護センター
〒920-2326 石川県白山市木滑ヌ4
TEL.076-255-5321 FAX.076-255-5323
URL <http://www.pref.ishikawa.lg.jp/hakusan/>
E-mail hakusan@pref.ishikawa.lg.jp

本誌は、再生紙へのリサイクル可能な用紙を使用しています



広告

「はくさん」に広告を掲載して PR しませんか？

広報紙広告ならではの

メリット

地域に根ざした
情報発信

石川県での
知名度向上

自治体発行の
信頼度の高い
広報媒体

お問い合わせは

092-716-1401

他エリア自治体広告もお任せください！

株式会社ホープ

福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG薬院ビル7F
東京証券取引所マザーズ市場 福岡証券取引所Q-Board市場 財源確保 検索